

いうことです。また、幼少期の情動を育てるには動物とのふれあいが何よりも効果的であるという、中川先生のお話を保護者の方々にも聞いていただきたいと思いました、保護者の方々にも参加していただいております。ただ、これだけでは飼育の方法はわかりませんので、獣医師さんが学校に訪問してくださったときに、管理職、飼育担当、児童生徒を交えて、飼育方法を教えていただいております。学校よっては全職員が出てくる場合もあります。この研修ももう4年目になりましたので、前回の指摘が改善されているかどうかの検証もできるようになっています。

<小林>

管理職の研修も必ず入れながら、先生方への飼育方法の研修を行っているということですが、管理職である丸山先生のお考えをお聞きしたいのと、中川先生には、いろいろな学校で研修を行っていると思いますので、学校に対してどのような支援を行っていらっしゃるのかということをお聞きしたいと思います。

<丸山>

今回のテーマともなっている、教育課程に位置づけることが、校長として飼育活動を見ていく際に、やはり重要視しているところでもあります。3年生の総合的な学習の時間では、元々のテーマが、木を育てるということでした。しかし、木は動かないし、学習の効果が薄いような気がしていましたので、木に変わる題材はないかと探していましたということはありました。また、動物を飼育するということに私を含め関心がない方が多いということが一番よくないことだということだと思います。したがって、学校全体に広げていくことが大切だと思いましたので、3年生だけに負担が行かないように、学校全体で取り組もうとしています。まだまだ学校全体に浸透し切れていないところはありますが、少なくともケージ飼いをしていくことで、全体の目にはよく触れるようになりました。

<中川>

全国各地で獣医師たちが学校の先生方に研修を行っています。私も呼ばれていくこともあります。山本先生のところは、研修会に管理職を出していただけるので、改革が非常に早く進みました。しかし、動物の飼い方の研修会だろうと、学校の先生方が受け止めている場合が多くて、そのような場合は全く効果を見ません。丸山先生は幸いにしてすごく頑張ってくださったのですが、そもそも、丸山先生が去年ここにきてくださったことがすごく大きなことだったんです。西東京市では平成3年から取り組んでいますが、教員研修は去年初めて行きました。そこでは、飼い方の研修だとい

うらえ方でしたので、管理職が一人もいませんでした。これはまた仕切り直しだと感じています。やはり管理職の理解が必要だと思います。

それから筑波大の附属小学校で、ハムスターを飼育する際に、ふれあい方の研修を行いましたが、ハムスターは逃げ出すと水を求めて行くので、逃げ出さないような工夫が必要だということを話しました。しかし、みんなその場ではうなずいていたんですが、1四夜になって逃げ出してしまい、次の日トイレで死んでいたということがありました。つまり、子どもたちは話を聞いてわかったつもりでいますが、それが実際になったときにこのような事故が起こって初めて現実のものとしてとらえるようになります。昆虫が死ぬということも悲しいことですが、ハムスターが死ぬということに比べれば大変な落差があるわけです。子どもたちは動物を欲しがりますが、人間のように体温があって、より強い思いを寄せられるような素材、教材が必要になると思います。先ほどの中島先生のご発表にもありましたが、3年生から4年生で学年飼育をしていない子どもたちは、道徳的に全く成長していないということに驚きました。道徳の時間は確かにたくさん行われていますが、どちらかというと道徳的な感性は下がっている傾向にあります。さらに、家庭で飼育していない子どもは下がっている。しかし、動物を飼育して動物に思いを寄せるこによって道徳性が上がったというところに注目していただきたいと思います。

それから、先ほど高校生に悪いことを言ったと大変叱られましたが、動物を飼うということは厳しいことなんです。齧歯類の動物は人間に病気をうつすかもしれないということは言っておかなければいけないことなんです。だから、子どもが夜店で飼ってきた動物を安易に引き取ってはいけない。また、先ほどの久喜市のお話にもありました、地域から引き取ってほしいと依頼されたときには、獣医師の立場として、すべて断っていただいている。きちんと管理された動物を学校に置いておく必要があります。また、シラミのついたモルモットなどは、様々な検査をしきれませんので、学校でかうべきではない。そのくらいに厳しくしなければいけないものです。ということで、高校生には厳しいことを言いましたが、やはり獣医師をつけて飼い、安心して飼育の意義を与えて欲しいと思いました。

そして、教育委員会の方には是非管理職の研修を入れていただけたらと思います。

<小林>

管理職の理解や、動物が好きな先生がいれば、継続して飼育することが可能となるということかと思います。また、そのようなことを組織的に行

つていく必要もあるのではないかと思います。

もう一つ必要なことは、教育課程での位置づけということですが、石井先生の学校では2年生から4年生までカブトムシを飼っているということですので、それをどう教育課程に位置づけているのか、その苦労などもあろうかと思いますので、お話しいただければと思います。

<石井>

昆虫はダメ、というようなことを言われてしまいましたが、私は元々昆虫が好きで、昆虫もちゃんと生きています。カブトムシの幼虫の背中をよく見ると、動かないながらちゃんと脈打っているんです。確かにウサギやニワトリのように温かみはないけれども、ちゃんと生きているんです。同じなんですね。そのところをわかつていただきたいです。

うちの学校はウサギやニワトリの飼育を決して邪険にしているわけではありません。確かに学年飼育は行っています。まだできる状態ではないということが正直なところです。ということは、先ほど中島さんが発表された、悪い事例の学校なのかもしれません。

ただ、私は前任校で宮下先生のもとで働いていました（府中第一小学校）ので、ここでは、長年学年飼育に取り組んでいます。ですから、学年飼育の大切さをふまえた上で、今も取り組んでいます。やはり、学校という組織の中では、一気に導入できる部分と、一つ一つ積み上げていかなければならぬ部分があると思います。そのための一つの手立てとして、私はカブトムシという昆虫を使っているということです。その中でだんだん価値づけていくことが大切です。特に都市部では、近隣から来る子どもたちだけではなく、遠くから通ってくる子どもたちもいます。したがって、急に何かを取り込むのではなく、だんだんと状況を作っていくことが大切です。そこで、そのような状況を作っていく中で、一人1匹ずつカブトムシを飼っていくことが、どれだけ子どもたちにとって影響があるのかということを意味づけていく必要があると思います。そして、子どもたちの変容を見ていきたいと思っています。本校では、理数大好きスクールの指定も受けていますので、理科教育を中心に立ち上げていくという取り組みの中で、生き物を飼ったり植物を育てたりしています。特にそれを教科の中に位置づけるということは、効果があることだと思います。

それから、学年飼育の件ですが、府中第一小学校で取り組んでいたときに感じたことは、飼育が学年の目玉になります。そうなると、うちの学年でこれに取り組んだら、子どもはこう育つということがすごくよく見えてくるので、それが教師の

側の安心感につながります。今はカブトムシを飼っていますが、これが柱になっています。このように、学校として、学年として、学校飼育動物という柱をもつことが大切なことであると思っています。<小林>

特色を持たせるということでお話しをうながしますが、ほかの学校で、教育課程への位置づけでの取り組みはありますでしょうか。

もしなければ、時間も10分を切っておりますので、会場の方々からご意見をいただこうと思います。<幼稚園園長>

私は、開かれた学校作り、開かれた幼稚園作り



というものが非常に大切だと思います。私の園では、ヤギの赤ちゃんが生まれたりすると、園を解放しておりますので、近所のおじいちゃんやおばあちゃんが孫を連れて見に来たりしています。そのときに、子どもがヤギにえさを与えていたりしている表情がとてもかわいいです。このように、地域に開放することで、子どもが集い、動物にえさをあげてひじょうによい表情をする。それを見て心和むということがあります。

また、私のところでは、「園長と保育を語る会」ということを行っています。そこでは、希望する保護者に15人くらいのグループを作つて見ていただいております。そのときお母さんたちに必ず、子どもたちが動物を世話する様子を是非見てくださいと話します。子どもたちは、ウサギたちのえさをきちんと包丁で切ったり、その順番を列をして待つたりします。動物を飼育するということで、待つ力や順番を待つ力を身につけることができます。このようなことなしに、教育課程に位置づけるということは、非常に矛盾を感じるということです。

<小林>

地域との連携や体験をふまえながら飼育を広げていく必要があるというお話をうながしました。

<大阪市獣医師会獣医師>

興味を持っていない人に、飼育を理解し、飼育



を広げていくためには、科学的なデータとして、たとえば、動物飼育が本当に有用であるというデータをもう少し明確に示していかないといけないのではないかと思います。私自身獣医師ですから、動物も好きですし、小学校時代は飼育係などをやっていましたが、飼育を広げるためには、できるだけ客観的なデータを教育者が評価しながら実践することが第一ではないかと思います。

また、獣医師として協力することは可能だと思いますが、教育的にデータをとって分析したりする部署があつたら教えていただきたいと思います。

<中川>

獣医師以外に、そういうことを考えている人がいないということを覚えておいてください。そういうデータをとるときには、獣医師さんの原動力がないとできないわけです。先生が大阪市で頑張ってください。今はそれしか言えません。

<小林>

今日の中島先生の発表で、飼育の有用性の裏付けとなるデータが示されたのではないかと思います。何でもやればいいということではなくて、きちんとしたデータの裏付けのもと、実践することが大切かと思います。

<中島>

先ほど、発表でも少し申しましたが、客観的な



実証データがすごく少ないと私は思います。中川先生が獣医師でないとやらないとおっしゃいましたが、本当にその通りでして、私たちの研究も中川先生の肝いりでできたということもあります。それを日経で取り上げていただいて、新幹線のテロップでも流れたそうです。世の中の人は有用だということを言わないと、実践に移らないと思うので、その意味では、この研究データは第一歩として大きな意味があることだと思います。

この会にとどまらず、いろいろな場所で発表をさせていただき、たくさんの人たちの心にインプットさせていただきたいと思っています。

<長野県動物愛護センター獣医師>



動物を介在することの有用性は、もうあえて言うことはないと思います。ただ、ここにいる人すべての人に日々考えていただきたいのは、子どもたちに、思いやりをもってほしいとか、痛みをわかってほしいとか、押しつけてしまう心配もあるということです。そうすることで、大人にとって都合のよいいい子を作り上げてしまうことになります。今、子どもたちはすごく苦しんでいます。親たちがいい子に育ってほしいと思うと、子どももそれに応えたいと思うんです。そんなふうに頑張っていると、身も心もくたくたになってしまう子どもも多いという現状があります。そういうことを、常日頃気をつけていただきたいです。

それからもう一点、子どもたちに命の大切さを伝えたいということはすごくよくわかります。しかし、命を大切にするということがどういうことかということについて、もう一度よく考えなければならないと思います。環境問題も含めて、われわれは命を大切にしているのですか?と問われたときに、みなさんどう答えられるのかということをよく考えてください。命を大切にするということを言うのは簡単ですが、実践するのはすごく難しいことだと思います。ついdoingを大人はしてしまいがちです。しかしbeingが本当は大事なのではないでしょうか。こういうことを大人たちは